

有識者意見

社団法人 環境情報科学センター 理事長
千葉大学 名誉教授

丸田 頼一 氏



今年が3年目となるUR都市機構の環境報告書は、継続的に努力されてきたことで、全体として風格や深みを感じられるよくなってきたものになっていると思います。示唆に富む意欲的な内容が多く、環境配慮に対する積極的な姿勢や態度が随所にみられます。編集やデザインにも工夫が施され、字も大きく非常に読みやすく推奨できるものです。

昨年指摘させていただいた次の3点に対する措置状況を確認しました。

① 地球温暖化対策の目標の設定

UR-ecoプラン2008を策定し、平成17年度を基準とした平成25年度における削減の数値目標を14,000トンとして設定した。

② 先導的研究開発に関する情報発信

研究報告会をはじめ実証実験住棟の公開など様々な工夫を凝らして実行された。

③ 職員の環境意識の向上

「都市環境セミナー」や様々な機会を捉えた職員研修などを本社や支社ごとに開催した。

以上のように、指摘事項についてそれぞれ実行に移されたことを高く評価したいと思います。

特集など時事問題について

洞爺湖サミットの年にふさわしい特集を組んだ構成は、真摯な姿勢で評価できます。今後も時宜を得た特集を盛り込むなど、時代と内容の結びつきを大事にしてほしいと思います。

URらしさのある環境報告書づくり

UR都市機構の環境報告書は、快適環境づくりや創造的環境づくりを重視している点に特徴があると思います。環境保全だけではなく、新しく環境をつくるという意欲的な姿勢が感じられるような報告書にすることが大切だと思います。

環境報告書とCSR報告書をまとめて1冊にする企業が増えています。UR都市機構の環境報告書にもすでにCSR的な内容が盛り込まれていますが、こうした流れを意識した作り方を工夫してみたいかがでしょうか。その際には、単に定型の項目をもれなく掲載するといった硬直したものでなく、自由な発想により独自性のある内容を期待します。

中長期の視点

地球温暖化については、「2050年までにCO₂排出量を60～80%削減」というような長期的な目標が語られるようになってきました。UR都市機構もUR-ecoプラン2008だけにとどまらず、こうした長期的なビジョンの打ち出しを検討されてはいかがでしょうか。当然、人口減少後の土地利用の変化など前提条件が変わってきますので、数量で示せないものは定性的な表現になることはやむを得ませんが、中長期スパンでUR都市機構の将来とCO₂削減を考えていくことが重要ではないかと思います。